

大豆管理情報（第4号）

令和8年8月20日
農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過（図1）

（1）気温

5月下旬の平均気温は、21.8℃（対平年差+2.8℃）と平年に比べかなり高かった。

6月の平均気温は、22.4℃（同+1.0℃）と平年に比べ高かった。

7月の平均気温は27.6℃（同+2.1℃）と平年に比べかなり高かった。

8月1～3半旬の平均気温は、27.8℃（同+0.3℃）と平年並であった。

（2）降水量

5月下旬の降水量は、35.5mm（対平年比98%）と平年並であった。

6月の降水量は、129.5mm（同75%）と平年並であった。

7月の降水量は、166.5mm（同68%）と平年に比べ少なかった。

8月1～3半旬の降水量は、64.5mm（同74%）と平年並であった。

（3）全天日射量

5月下旬の平均全天日射量は、18.4MJ/m²/日（対平年比96%）と平年並であった。

6月の平均全天日射量は、19.0MJ/m²/日（同110%）と平年に比べ多かった。

7月の平均全天日射量は、19.3MJ/m²/日（同116%）と平年に比べ多かった。

8月1～3半旬の平均全天日射量は、19.4 MJ/m²/日（同104%）と平年並であった。

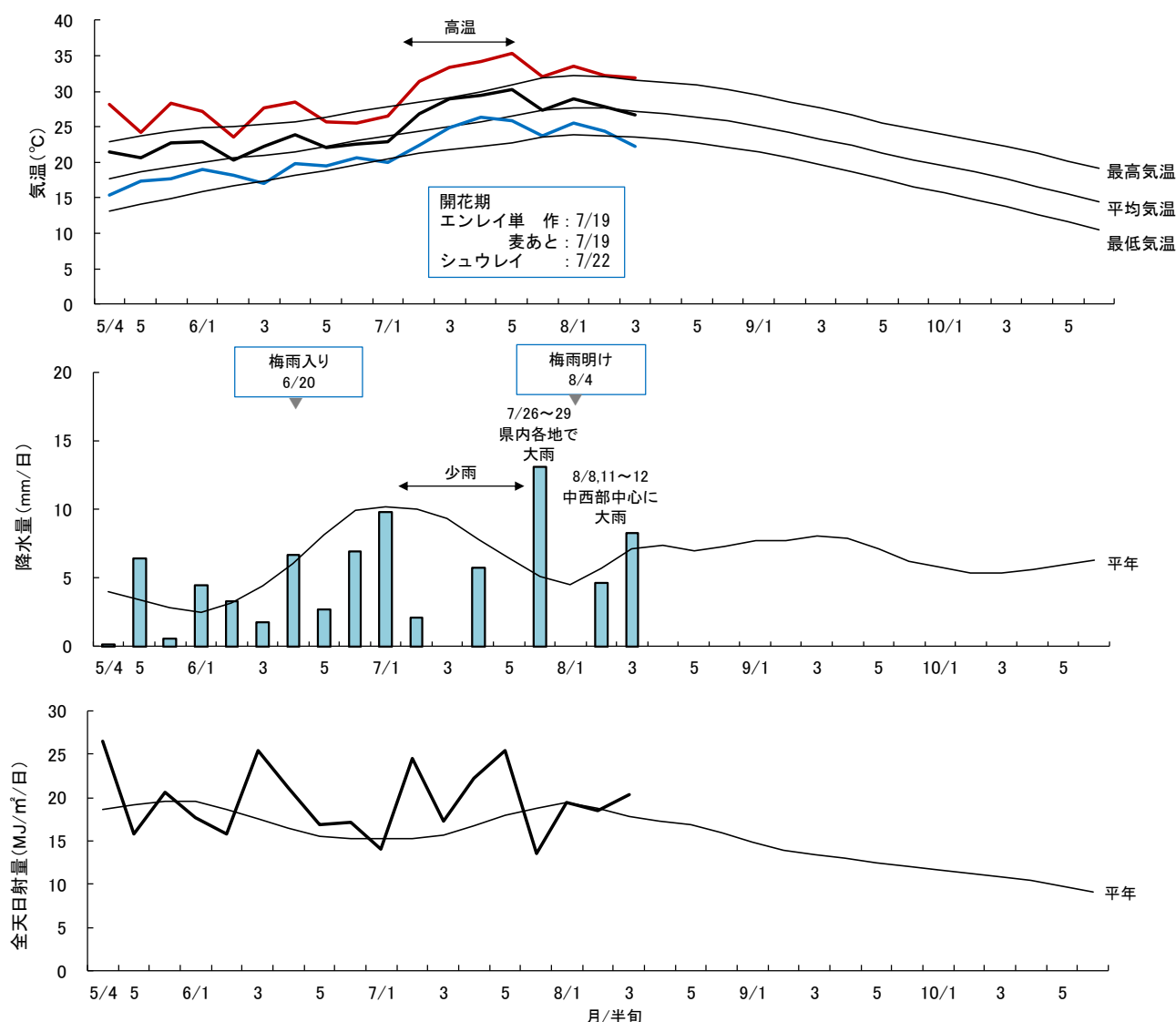


図1 令和8年の気象経過（富山地方気象台）

2 生育経過（生育観測ほデータ）

（1）エンレイ（単作）

近年に比べ、主茎長は並、本葉葉数は0.2葉少なく、一次分枝数は0.2本多くなっている。

（2）エンレイ（麦あと）

近年に比べ、主茎長、本葉葉数は並、一次分枝数は1.4本少なくなっている。

（3）シュウレイ

平年に比べ、主茎長は長く、本葉葉数は0.4葉多く、一次分枝数は0.8本少なくなっている。

表1 大豆生育観測ほ調査結果（8月20日調査）

品種	地域	播種月日 (月日)	栽植本数 (本/㎡)	主茎長 (cm)	本葉葉数 (葉)	一次分枝数 (本)	開花期 (月日)	
エンレイ	単作	R8	6月5日	16.7	71.0	12.5	2.9	7月19日
		R7	6月1日	16.7	71.5	12.7	3.1	7月17日
		近年	6月2日	16.7	74.7	12.7	2.7	7月18日
		近年比・差	3	100	95	-0.2	0.2	1
	麦あと	R8	6月4日	17.2	71.4	12.5	1.5	7月19日
		R7	6月7日	16.1	65.6	12.5	2.9	7月23日
		近年	6月5日	16.6	71.8	12.4	2.9	7月20日
		近年比・差	-1	103	99	0.1	-1.4	-1
シュウレイ	R8	6月7日	16.4	71.7	12.4	2.5	7月22日	
	R7	6月9日	11.7	55.4	11.8	3.1	7月24日	
	平年	6月6日	14.8	63.4	12.0	3.3	7月22日	
	平年比・差	1	111	113	0.4	-0.8	0	

注1) 調査ほ場数: エンレイ(単作5、麦あと3)、シュウレイ(単作3)

注2) 平年値はH28～R7、近年値はR2～7

注3) 平年比(近年比): 栽植本数・主茎長、平年差(近年差): 播種日・本葉葉数・一次分枝数

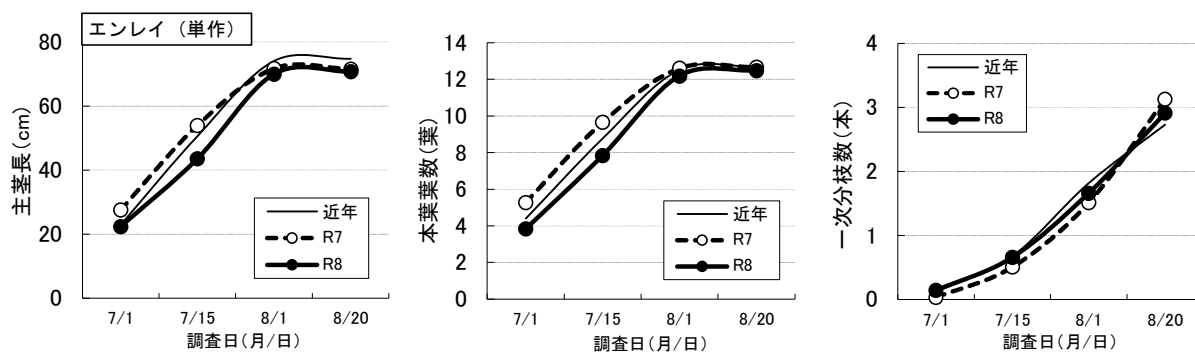


図2 単作エンレイの生育経過

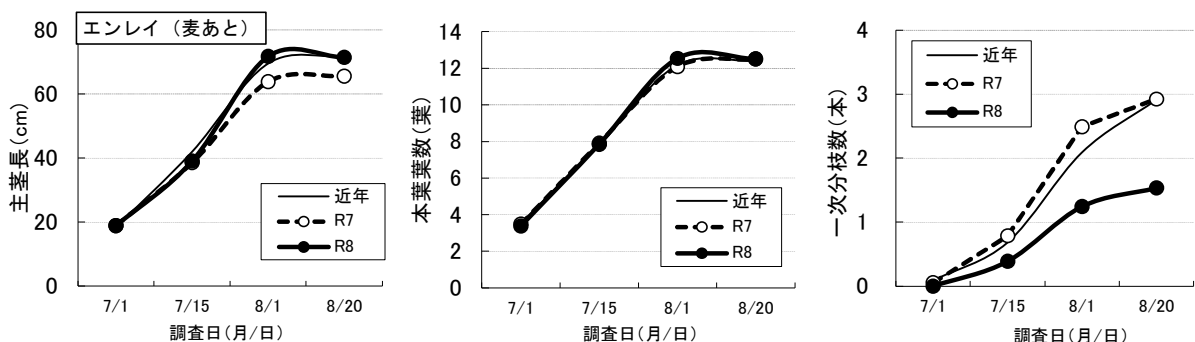


図3 麦あとエンレイの生育経過

3 当面の技術対策

- ・英数確保と子実肥大を促すため、9月上旬頃まで降雨に頼らず積極的に畦間かん水を実施する。
- ・大豆カメムシ類が多発(発生予察注意報第5号)していることから、2回の基本防除(カメムシ類及び紫斑病)を徹底する。
- ・常発地域や2回の基本防除後に発生が多くみられる場合は、9月上旬に追加防除を実施する。

(1) 排水対策

- ・降雨後の排水を速やかに行うため、また、畦間かん水の入排水の効率化のため、溝の手直しや連結、排水溝の掘り下げを確実に実施する。



図4 排水促進に向けた畦間と額縁排水溝の連結

(2) 畦間かん水

- ・畦間かん水は、収量の確保(英数確保・百粒重の増加)、品質の向上(しわ粒や英ずれ粒の発生軽減)、青立ち防止につながることから、開花期頃から9月上旬頃まで晴天が3日以上続くと見込まれる場合は、降雨に頼らず積極的に実施する。
- ・かん水は短時間で実施し、ほ場全体に水が行き渡ったら、水口をしっかり止め速やかに排水する。
- ・用水が下流域まで行き渡るように、地域での計画的かつ効率的な水利用に努める。

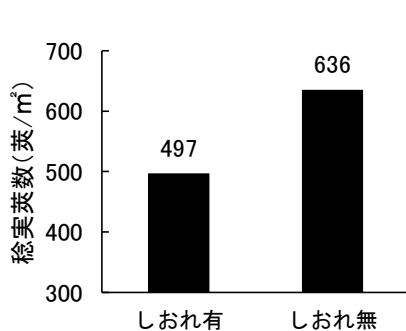


図5 開花期以降の水不足が英数に及ぼす影響(R5現地ほ場、成熟期調査)
注) 開花期翌日～8月下旬までの降水量: 37mm

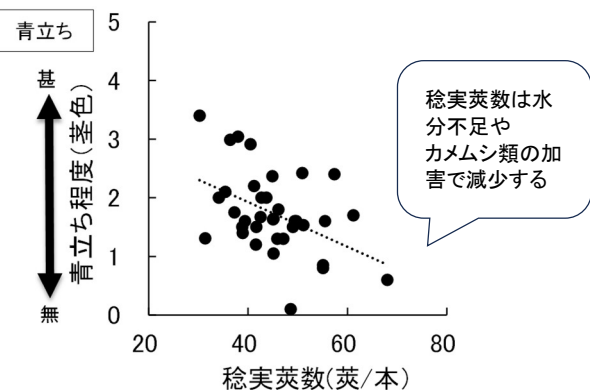


図6 青立ち程度と稈実英数の関係(R2～R7生観 エンレイ)

(3) 病虫害防除 **大豆吸実性カメムシ類: 8月14日注意報発表**

【基本防除】

- ・大豆吸実性カメムシ類(以下:大豆カメムシ類)の発生状況は、1.09頭と平年(0.18頭)に比べかなり多くなっている(8月7～10日調査、農研)。
- ・英伸長期の加害による落莢や、子実肥大期の加害による子実の肥大停止や被害粒の増加は、収量・品質の低下のみならず青立ちの発生につながるため、紫斑病と大豆カメムシ類に対して、2回の基本防除(2回目:子実肥大期)を徹底する。
- ・同一系統の薬剤の連用は避け、莢や茎葉に薬剤が十分かかるように散布する。

【今後注意が必要な病虫害】

ア 大豆カメムシ類(図7、8)

- ・山際等の常発地域や2回の基本防除後に発生が多くみられる場合は、9月上旬に追加防除を実施する。



図7 大豆カメムシ類

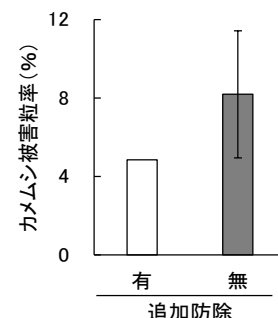


図8 カメムシ多発年における追加防除の有無と被害粒率の関係(R6生観)
※追加防除有(n=2)、無(n=9)

イ ハスモンヨトウ（図9）

- ・若齢幼虫による白変葉被害がみられたら、速やかに被害葉を取り除き、ほ場外で処分するとともに、発生状況に応じて薬剤を散布する。
- ・防除の際は葉裏にも薬剤が十分かかるように散布する。



図9 ハスモンヨトウによる白変葉被害

ウ ハダニ類（図10）

- ・生育観測ほにおけるハダニ類の発生株率は40.0%と平年(20.9%)に比べ高かった（8月7～10日調査、農研）。今後、少雨となった場合、被害の拡大が懸念される。
- ・多発すると子実が小粒化し減収するため、葉の黄化が拡大している場合は、速やかに防除を行う。
- ・防除の際は葉裏にも薬剤が十分かかるように散布する。

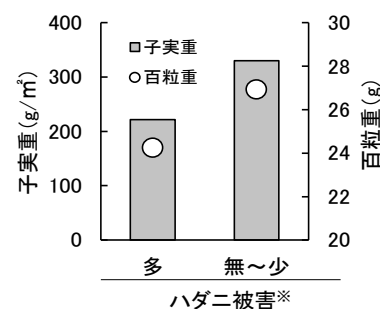


図10 ハダニの被害程度が子実重と百粒重に及ぼす影響（R5 現地ほ場）

※9月上旬の被害、多：ハダニによる葉の黄化が株の80%以上、無～少：10%以下

エ 葉焼病（図11）

- ・強風雨でまん延し、多発すると収量、品質が低下する。
- ・9月上旬頃まで台風等の強風雨による葉の損傷が予想される場合は、その直前又は直後に「Zボルドー」等で防除する。



図11 葉焼病

オ 白絹病（図12）

- ・高温・多湿条件で発病が助長される。発病すると黄化・萎凋し、症状が進むと立ち枯れる。
- ・排水対策を徹底するとともに、発生初期に発病株の抜き取りやカナメフロアブル等による防除を行う。
- ・菌核により土壌伝染するため、多発ほ場では連作を行わない。水稻作とのローテーションにより菌密度の低減を図る。



図12 白絹病
（左）萎凋株（右）株元の症状

（4）雑草対策

- ・ほ場内の大型雑草や難防除雑草は、雑草が結実する前に防除（除草剤塗布、地際からの刈取り等）を徹底する。
- ・特に、帰化アサガオ類やイヌホオズキ類は水田周辺等も含め防除するとともに、防除後も再度発生することがあるため、継続的に防除する。